

毎年八月になると、あの頃のことを思い出されます。夏の暑さ以上に戦局の厳しさが迫ってきて其の緊張感に支配され厄ていた頃でした。

あの日、出勤途上で建物疎開の為に市内へ向う国民義勇隊の人々に出会いました。旧国道の松並木の下を数百人が隊列を組んで旗や職を先頭に行進していった姿を今も忘れることが出来ません。

学徒動員の工場で一生涯命作業をしていた時、窓外が青白く輝いた閃光に包まれました。次の瞬間、爆風が私を床に叩きつけ、工場は崩壊、その中を夢中で脱出する時の動転した恐怖感、横穴壕に入り一息ついたものの、次には市内から逃れて来た人の悲惨な姿に驚きながら市内の様子を見れば、空一面、暗黒の雲煙が覆い、その下に紅蓮の炎が各所に望見されて、視界が一変した有様、只々呆然としました。

続いて降ってきた雨が後に黒い雨と言はれたのですが、私にはその色の記憶は無かったです。たまたま近くに落ちていたトタン板を拾い同僚と前後を持って頭上をおおい雨を防いだのです。その雨が放射能を含んでいるとは、知る由も無かったです。

六日夜は、井の口にあった工場の寮に避難し九日までですごす事が出来ました。七日、八日は、天満町の本工場へ救援に向いました。そして市内の惨状を目撃し焦土に多数の無残な亡骸を見て戦場を実感したのでした。

九日になって、山陽本線が復旧したと聞き避難所に別れを告げて広島駅へ向ったのです。天満町から東を見ると、一望の焼野原、点々と焼ビルが残っている瓦礫の砂漠です。

遠くの山々、瀬戸内の島々まで見通せる有様です。救援に来た兵隊さんが、死体を収容したり障害物を片付ける作業をしている中を、ひたすらに歩きました。相生橋から紙屋町、八丁堀、京橋、猿根橋を通り、広島駅にたどり着きました。やっと汽車に乗り、賀茂郡西條町の自宅に帰ることができました。

戦後は目前の生活に追はれて、被爆について語ることは無かったのですが、退職后、何をすべきか模索していた頃、ピースボランティアになり、続いて被爆体験証言者を委嘱される様になりました。あの時、被爆者の一人ではあったけれど、無傷で生き残った事は、何か多くの犠牲者に対し申し訳無いという気持がありました。しかし段々歳月が流れ被爆者が少なくなり、我々が見てきた事を語るのは、生き残った者の使命ではないか、無念の最后を遂げた人々に代って、六三年前、此の広島であった事を、次の世代の人々に伝える為、与へられた時間の有る限り微力ながら努力したいと思いました。

これは神様が、私に示された人生の最後のそして最高の務めであると信じて、毎日を感謝して居ります。